

2回に渡り、オスカー・ピーターソンの魅力をお届けしてきましたが、最終の今回は音楽的な解説からは少し離れた面も含め解説してみたいと思います。

◎評論家からの的はずれな評価も

商業的に大成功を収めたピーターソンですが、評論家から高く評価されることは少なかったと思います。どの時代でもどの音楽ジャンルでも、評論家は「芸術性」を重視し、特にジャズでは先進性や前衛性、時には思想的な要素までを評価したがる傾向があったので、予定調和的に何時でも誰でも満足させてしまうピーターソンのようなミュージシャンに対しては正しく評価できなかったのだと自分は思っています。

ピーターソンの長い演奏キャリアの中でジャズはどんどん変容して行きました。マイルス・デイヴィスが始めたモード・ジャズに端を発し調性の解体が始まり、フリージャズへの突き進んでいく中でも、ピーターソンは純粋に音楽を楽しみたいリスナーに心地よい演奏を提供するスタイルを貫きました。そこに対して批判的な見方をする評論家も少なくなかったわけです。

特に日本では、先鋭的なジャズこそが閉塞的な政治状況を打破するかのような批評もあり、先鋭的でなければジャズじゃないという極論も多く見られました。その結果60年～70年代にかけては、ジャズリスナーの間でも、ピーターソンの演奏を軽く見たり、「ピーターソンが好きだ」と言うこと自体、「本当のジャズが分かっていない」と取られるような雰囲気は確かにありました。

スイングジャーナル編集長から評論家に転じた中山康樹氏(故人)が、ピーターソンを「ひらがなジャズ」と評していました。誰にでもわかりやすく入ってくるという面である意味当たっているとも言えるのですが、軽く見ているというニュアンスは感じられますよね。

中山氏含め、あからさまにピーターソンのジャズを貶める批評は少なかったと思いますが、無視に近い傾向はあったと思います。今振り返ると、音楽の本質から外れていると感じますが、自分も当時はこういう風潮に影響されていたので、あまり偉そうなことは言えませんが。

◎弾きすぎた時期も確かにある

ピーターソンに対しては、何を弾いても同じように聴こえるという批判もあったように思います。確個とした自分のスタイルを持っているがために、ピーターソン流になってしまうということはありません。例えば、ビル・エヴァンスの名曲Waltz For Debbyをピーターソンが弾くとこうなります。
<https://www.youtube.com/watch?v=yRSSJ08kuME>

小気味良くスイングしているのですが、特にアドリブに入るとエヴァンスが作り上げた曲の世界とは開きがあるのは確かです。しかし、これは個性を確立したミュージシャンには多かれ少なかれ誰にでも言えることで、逆に1回目で紹介したピーターソンのブルースのスイング感をエヴァンスが出せるかといえば違うでしょう。

ピーターソンは自己のスタイルをきっちり確立していて、ツボにハマれば誰にも真似のできないレベルで、スイングな心地よい演奏をするヴァーチュオーゾだったと言えます。ただ、他のピアニストより多くのジャンルの曲を弾いたので、スタイルとの違和感が出たケースもあるということだと思えます。

弾き過ぎ、音符が多すぎるという批判もありました。いくらでも多くの音符を弾くことができるため、すべての時間を音符で埋め尽くしてしまい、聴いていると疲れてくる音源も確かにあります。グランツのレーベルであるヴァーブの後で契約したドイツのMPSというレーベルでの演奏はそういう面もありました。
<https://www.youtube.com/watch?v=fptJla8m57M>

◎隠れた好演—PLAYS HAROLD ARLEN SONG BOOK

前回も書きましたが、ピーターソンを世に出したノーマン・グランツは、一人の作曲家

のオリジナルだけを演奏する「ソングブック」シリーズを得意にしていました。エラ・フィッツジェラルド(vo)のプロデュースでは、ガーシュインやコール・ポーターのソングブックで成功しましたが、ピーターソンでもソングブックのアルバムを出しています。

この中でも異色なのがハロルド・アーレンのソングブックです。エラ同様にガーシュインやポーターのソングブックもリリースしていますが、自分はアーレンのソングブックが出色だと思っています。アドリブは取らないのですが、原曲メロディをハーモナイズしてジャズ的に気持ちよく聴かせてくれます。
https://www.youtube.com/watch?v=9vcblhjEss&list=OLAK5uy_IRhbBA-o9zqwQaIG00VmdPTK1ihgUYMUc&index=8

アーレンはユダヤ系が、Stormy WeatherやIll Windなど、ユダヤに通じるブルージーな曲から永遠のファンタジーメロディであるOver The Rainbowまで素晴らしい曲を書いた人です。ピーターソンはやっぱり自分の世界に引きつけるのですが、原曲の魅力は失ってなくて好きですね。MPSでの演奏とは全く違ってきますし、BGMとして聴いても良い感じですよ。

◎楽しそうな表情も魅力のうち

ピーターソンは実に楽しそうに演奏するのも有名でした。ジャズが好きでピアノが好きで、共演者と一緒に演奏するのがたまらなく楽しいという風情で弾くのです。演奏中のピーターソンの表情をよく捉えた動画があったので見て下さい。
<https://www.youtube.com/watch?v=q5IaMdhVBFo>

ベン・ウェブスター(ts)との共演で、ウェブスターには衰えも見られるのですが、ピーターソンはそんな事にはこだわらず実に楽しそうに弾いています。23分16秒辺りから始まるPerdidolは、特にハッピーそうです。こんな風に演奏されのを見ていたら、聴き手も楽しくなってきますよね。これもピーターソンの魅力の一つだったと思います。

リクエスト曲を積極的に弾くなどサービス精神旺盛な一方で、ジャズクラブの行儀の悪い客に対しては一言言うこともありました。シリーズ1回目で紹介した本のインタビューでこう言っています。「客があんまりやかましいと『君たちはクラシックのコンサートでもこんなのかい?』と言って怒るよ。音楽の形が違うからといって態度を変える必要はないと思うんだ。ジャズを聴こうと、リンカーン・センターでデビッド・オイストラフ(クラシック・ヴァイオリンの名手)を聴こうとね。」

◎名曲「Hym To Freedom」

ピーターソンの解説で触れられることは少ないですが、素晴らしい曲も書きました。生まれ故郷のカナダをテーマに書いたカナダ組曲は佳曲も多く、中でもWheatland(小麦の国)は評価が高いです。
<https://www.youtube.com/watch?v=8C1VZHRFH2k>

最も有名なのは「Hym To Freedom」(自由への賛歌)で、自分もこの曲が大好きです。Lydianでも結構演奏されます。まずは本人の演奏から。
<https://www.youtube.com/watch?v=tCrrZ1NnCuM>

この曲を紹介する時、どうしても聴きたくなくなってしまうのが、2018年に亡くなられた佐山雅弘さんのソロ演奏です。心に染みわたるような名演で、この曲に関する限りピーターソンよりも自分は好きですね。プレイヤーとして一つの頂点を極めたピーターソンが残した名曲を、身近に聴けた佐山さんが演奏し、それに最も感動できるというのも、ジャズの素晴らしい所だと思います。
<https://www.youtube.com/watch?v=1HmSIRxOWx0>

以上